

Title	慶應義塾に学んで：最終講義(宇治順一郎教授退任記念号)
Sub Title	My Life in Keio Gijuku(In Honour of Professor Junichiro Uji)
Author	宇治, 順一郎(Uji, Junichiro)
Publisher	
Publication year	1985
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.28, No.5 (1985. 12) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19851225-04053862

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
28 卷 5 号
1985年 12 月

慶 応 義 塾 に 学 ん で

— 最 終 講 義 —

宇 治 順 一 郎

ただ今幹事の佐野さん、それに続いて藤澤学部長から過分のお言葉を頂戴しまして、いささか面映ゆく感じております。初めに一言、さぞかし期待をしてお集まりくださった親しい方々でおありのほすだけに、お詫び申し上げておかなければならないことがあります。それは、私、最終講義というような堅苦しいことをする気は毛頭ありませんで、昨年おやめになりました勝又先生と同じように、ひそかに、静かに去って行くというつもりでございました。

何年か前から「最終講義」ということがいつの間にか諸学部で行われ始めているのを見につけても何だか些か官学好みの真似のような気が致し、自分がしようとは思いませんでした。学生諸君を前においてということになりますと、現に先週段階で私が担当しております3つの講義の締め括りを、それぞれつけさせていただいております。特にこのたびは、学生諸君にとっては明日から期末試験開始ということで、実質上ほとんど今日ここへ聴きに來られないと前もってわかっておりましただけに、結局は多くの親しかった友人の皆様、同僚の皆様を前にして講義とはいささかおこがましく、むしろお別れのご挨拶をさせていただくという軽い気持でもって、立たしていただいたような次第です。委員会からのご要望と私からのお断わりとの間に、つまり最終講義という形ではなくせめてお別れのご挨拶として私が長い間いろんなことを学ばせていただいた慶応義塾での想い出話をと申したこと、そのやりとりがいささかいき違いがあったようです。委員会の方と直接打ち合わせたというようなことが今日まで全然なく、第三者を通じたために、現在私自身この部屋で行われるということすら知らぬ状態でした。これは幹事佐野さんの責任では毛頭なく、佐野さんは突発的なお役目まで引き受けさせられて非常にお忙しく四苦八苦なさっていらっしゃる最中だそうりで、その方に押しつけ放しにした実は委員会の責任であり、且つ礼を失することではないか。そういうことをしておるから、運営委員会の活動のほうが、非常におかしくなってくるのではない

か。もともと委員会制度を作った時には、特定者のみに仕事と責任が偏らないように、みんなが分業の協業を行うという趣旨で学部改革をやったはずじゃなかったのか。などとまたつい憎まれ口をききたくなるようなことになります。かつて8年前の入学試験事件の時に、私も佐野君と同じような立場におかれ二つの役職をぶつけられて四苦八苦したのを思い出してしまふからです。そういう人選の仕方をする委員会のあり方に敢えて苦言を呈します。私としてはかつて学部を同じくし乃至現に同じくしている人たちとこういふようなことをめぐって、思い出話をしながら、私のざんげ話もあり、あるいは今後へのお願いをし、感謝の言葉を捧げてお別れのご挨拶をするつもりでいたわけなんです。従いまして最終講義なんていふようなおこがましいことが言えるような権威的形式的なことをするつもりも、できるつもりも毛頭ございません。悪しからずご了承願いたいと思ふ次第でございます。

さて、思い出となりますとまず最も強烈でなまなましく蘇りますのが、本来ならばこの方々の中にお並びくださってるはずのお二人、私の仲間である小島三郎前学部長と山榊忠恕君とが、昨年7月と11月に相次いでお亡くなりになってしまった淋しさです。お二人とも私のとりえを、非常によく理解してくださった方でした。私自身が送られるとばかり思っていたのが、逆に私の方で見送らなければならなくなつたということは、堪え難い程残念なことです。

特に小島君に対しましては3年前でしたか、わが学部が25周年を迎えた折に、せめて25周年の小史をと託されておりました。その途端に私が病気に倒れ入院してしまいましたため、お約束を果せないままであることを非常に残念に、申しわけなく思っております。最初にお二人の尽きぬ思い出に心からの敬愛と哀悼の意を捧げさせていただきます。

二

慶応義塾と私とのかかわりというのは、なんと48年半にも及んでいます。半世紀近くです。もっとも48年半と言いましても、8年半は実は長い大学生活でございまして、途中で本科2年になりました時でしたか、発病のために倒れまして2年余り休んでいたところが学年短縮のため3年間落第した結果になりました。私は日中戦争が始まりました1937年予科へ入学し、卒業しましたのが敗戦の8月15日の1ヶ月半後の9月30日でした。文字通り戦争中の妻まじくみじめな大学生活を送りました。自由といわれた筈の慶応がどうしてここまで軍国主義への途を選ぶ必要があるのかと悩みながら……。

私も卒業したら、何とか就職しなければいけないんだと思ったのですが、どう考えても就職する気持ちにはならない。どこへ就職して、どういう職業を求めているのか自分ではさっぱりわからない。といいますのは、戦争中に私のような愚鈍な者でも、だんだんと戦争に対して疑惑が濃くなりま

して、最終的には全くどうしていいか自分の行動、言動の基準がわからなくなってしまいました。私は学者になるつもりでも、教師になるつもりでもなく、大学へ家業を継ぐつもりで入って来たのです。私の親父がやっておりました家業が、全国のデパートへ繊維品を卸している問屋業であったわけで、最初はそれを継ぐつもりで慶応義塾へ入って来たわけなのでございます。従いまして学校での一通りの勉強は一応真面目な学生として、お粗末ながら一人前はやり、また好きな音楽活動もやっておりながら、父の会社へ出かけまして、「今日は三越、今日は松屋」とそれぞれの係りの者について仕入部へ行ったり売場を観察したりという形で実習をしていたことが、学生中の前半期にございました。その間15年戦争の満州事変以来、太平洋戦争に至るまでの間、社員が戦争に召集されていったり、あるいは帰ってきたりという出入りがかなり多かったわけです。そういう人達から現地での噂や直接の体験話を聞いて猛烈なショックを受け、戦争というものが恐ろしくなってきました。入学した時には私は商売人の息子でしたから非常に保守的な思想の持ち主で、保守的な発想が戦前に強く叩き込まれていただけに、なかなか抜け切らなかったんですけども、しかし戦争に関しましてはこれは根本的な疑いを持ってしまいました。人間とは何たる動物なのだろう。初めは日本が戦争に勝っているのか負けているのかわからなくなった。最終的には日本はかえって負けた方がいいんだという結論だけは、学生時代の最後につくようになりました。病気で寝ておりながらそういうことを悩み続けながら、それじゃ自分は人間が今までどうして来たのか、人間のたどった跡を自分でもって勉強しなきゃ駄目だというので、歴史の勉強を病いの床の中から始めたというのが、私が勉強へ本式に取りかかる初めとなったようなわけです。そして研究会は高橋先生に次いで尊敬しておりました野村兼太郎先生の研究会に入らせていただき、歴史の中に人間の意志能力とそれを超えた宿命的な力との交錯の跡を求めるため経済史の分野にわけ入ることになったのであります。

従って就職を考えるどころの状態ではなく、非常に悩んだんです。もっと勉強を続けなければ、自分が何を選んでいいんだか、その基準が掴めない。卒業が迫るが当時は学校に残る途が閉鎖されておりまして、経済学部では最初私の1年下級生であったはずの鈴木諒一・中鉢正美のお二人、私が病気で落第を続けている間に、鈴木君を最後の助手、中鉢さんを大学院の最後の特別研究生(これは戦時中でも学問の伝統を絶やさないためにといって少数の限られた大学にだけ政府がつくった制度で文部省から奨学金をもらいながら、大学院生として戦争に召集を免れて勉強を続けるもので、制度として作られたばかりでした)としてそれらの採用が打ち切られていました。それ以前の助手は皆戦争に出かけ、研究室にはだれもいないような状態であったわけです。ですから私は学校で勉強させていただこうにも残る術がないので就職せざるを得ない。その結果勉強を続けながら給料を貰えるところはないかと考えました。慶応の後ろに三井の屋敷跡がございまして、そこに三井の「金融研究会」というのが当時ございました。三菱経済研究所と並んで二大財閥の研究機関としての重要な役割を占めまして、そ

こには第一次大戦後の経済・金融研究のレポートなど現在塾の図書館にその業績が貴重な資料として並んでおるわけでございますが沢山ございました。そこへ出願し採用していただくことが決まりました、10月1日から金融研究会で勉強できるということになっていたんです。そうしましたら8月15日の敗戦、9月1日になりましたから、大学は戦争が終わったから10月1日から大学院だけ開くという、大学院生の門戸が開かれた結果になったわけで、それで私は就職をやめたということになりました、永田清先生にお詫びをしまして、実は大学の野村先生の指導の下で旧制大学院に残らせていただいた。従って卒業と同時の戦後派第1号などと冗談をいったもので、いらい現在まで40年間（正確に39年半）歩ませていただいた結果になるわけでございます。

三

40年間の真中に義塾派遣の留学があり、それを境として前半の20年弱と、後半の20年間と、この二つの時期によって私の歩んだ道というものは、かなり対照的な表現をとっているように感じとれるんです。さらに詳しくみると、前半の20年の中でも、それからまた後半の20年の中でも、それぞれが前後10年近くの単位ぐらいに分かれるようにも考えられ、従って全体を通じると、四分割できるかなと思ったりするわけなんです、まず大きく分けて考えてみました場合には、前期、後期という形で、二つに大分することができるんじゃないかと思うのです。これからの話は時間の関係上、すべての期間に亙るのは到底無理なので、いっそ逆に古い思い出にふれたほうが、少しでも多くの方の御参考になると思いますので、御諒承下さい。

(1)

前期特に第1期は、私自身が非常にノンポリの人間から発足しまして、必死になってわかつわかつという、勉強を無我夢中で続けておりました。その時分に書きました本が「食糧営団史」という米の配給の歴史、これは自分の先生から言われまして、丸4年間かかってお尻を叩かれながら、従って部分的に学会雑誌へ発表するというような余裕もないままでもって、急拠1,100ページばかりの大型の本にまとめ上げたものです。その他、関東農村の研究をすとか、その他の若手の仲間5人と共同で「経済学五講」という本を、当時の学部長金原さんの編纂で出すとかした時代です。表面的にはかなり私自身、ちょっと変則的な点はありましたけれども、一応最初の6,7年程は順調な歩みを実は続けたことができたと思います。大学院へ先程申しました1945年の10月1日に残り、翌年の4月1日に特別研究生、次の年の4月には上級特別研究生に任命されまして、慶応からはお金はもらえないけれども、文部省から月給が出るという形で、そこへ後述の「食糧営団史」の仕事も頂き（当時としては指導教授に内証でアルバイトをすることなど首というのが不文律でしたから）何とか息

をついた。戦後親父が急速に没落しただけに、親に迷惑をかけず何とか切り抜けるきっかけができたからです。

当時私は江戸時代の農民文書を読めるようになりたい、というのが念願でした。それには次のようなわけがあります。私の学生時代の卒業論文のテーマといたしますのは、実はなんと「奈良時代の正倉院文書」を対象としたものでした。私は最初、野村研究会では、「明治初年の地租改正」を考えたんですけれども、地租改正前後の小作関係、特に小野武夫さんの「永小作論」などを読んでおきますと、だんだん小作関係の複雑さがわからなくなってくる。それからもう一つ、官民有区分ということが非常にわからない。これらを理解するにはどうしてもその前の時代を知らなきゃならないと、江戸時代の勉強を始める。そういう形でだんだんと自分の研究がさかのぼってしまいまして、研究会で最初私が中間報告を野村さんにした時には、そのテーマがいつの間にか「名の研究」となっていたんです。それが更にさかのぼって実は考古学まで行きかけて、考古学の主要文献や報告書なども随分当時報告書類読みあさったんですが、当時の考古学といたしますのは土器その他の遺物類を集めて、それで年代別地域別に整理区分しているというような研究が多くて、われわれの関心に近いものといえばせいぜい農耕・米作の起源が、ちらほら言われ出したくらいにとどまりまして私の関心としたような住居址の発掘だとか、土地所有の研究だとか、そんなようなことは全然やってなかった時代なんです。ですから私はそれはあきらめて、じゃあ対象とできる原点ということになりますと、どうしても正倉院文書へ行かざるを得なくなる。従って私の卒業論文は、「正倉院文書の戸籍と計帳を中心として」という副題のもとで「古代村落における土地関係」というタイトルの報告になりました。それも学生中は勤労働員で工場へ連れて行かれたり教務の整理を手伝わされたりしていたもんですから、ゼミの中でも論文として完全なものに書き上げることができないままに、本当の報告だけをかさねさせていただいて、むしろ大学院へ残ってからそれを本式に素案の原稿を論文にまとめようとしたんです。

ところが皮肉なことに、その作業にかかっている最中に、全く同じような、また非常に素晴らしい研究が「社会経済史学」誌上に発表されたのです。それが石母田正さんの「古代家族の形成過程」その副題が「正倉院文書所収戸籍の研究」(同学会誌の第12巻第6号)です。それは実は戦争中の「社会経済史学」が一応出版を停止した最後の号に掲載されたのが、印刷・配布が後になったものでした。私はただもう啞然とするばかりでした。この大ベテランが実に見事な手法論を駆使されて、正倉院文書を徹底的に研究している。これはやっぱり古代、中世をいじくるためには、どうしても基礎的技法から叩き上げた方には駆け出しの自分など到底太刀打できるものではないと、実は舌を巻いたわけなんです。しかし分析手法は拙いものであったけれど狙った意図は全く同じような側面であったわけで、野村先生はそれなりに評価してくださったわけでした。

(2)

そこで私は古代や中世などは当分修業した後でなければ無理だと考え、その後先生に、まず近世の農村文書の習練から始めさせてほしいと申し出たわけです。

そうしましたら野村先生から割当てられた仕事というのは（当時野村先生は経済学部長と図書館長との兼務を続けられておまして、戦時中は第1校舎現102番、戦後は図書館の八角塔1階の館長室にいつもおさまっておいでになったわけです。）「この最上階に、未整理の農村文書が運び込まれてきているから、それを整理しながら読む稽古をしてみろ」といわれ、そのついでに「簡単なことをいちいち聞きに来るなよ、自分で考えて考えて、どうしてもわからないところがあったら聞きに来い」と念を押されたのです。そこで私は毎日八角塔の上へ行って、水害のあとで板のようになっていた古文書を、1ページずつはがしながら読む訓練を始めました。

張り紙を落とさないように努力をしながら開いていきますと、砂がさあーと溜ったのがおこってくる。私は経済学部で助教授になって2年目に2度目の大病をしまして倒れ、3年間病氣してしまったわけですが、その病氣の一因に古文書整理があったかなというようなことを、後になって思い出したような次第でございますが、そういうようなことを実は自分でやっていた最中なんです。そうしたところへ野村さんから、「お前さん一つ米の配給の歴史をやらないか」と、ひょっと言われたんです。「やるというのはどういうことですか」と反問しましたところ、「いや、営団へ行ってその資料を調べて、重要な資料が見付かったらそれをチェックして書いてきてくれりゃいいんだ」というので、私はてっきり野村先生ご自身がお書きになる、そのための資料を私が探りに行って、重要なめぼしいものを自分で持って来ればいいんだというふうに思いました。当時はいわゆる研究カードとか、そんな現在のような文房具類ができてる時代じゃございません。戦争中に残ったような原稿用紙の余りであるとか、それから便箋みたいなものであるとか、そういうようなものを鋏で切りまして、自分で薄っぺらいカードを即席に作って、毎週のように食糧営団に通いながら、そこにある資料を見ながら、重要なものを書きとめて、野村先生のところへ持って来て、報告しますと、「ふんそうか、ふんそうか」と先生ご覧になっていらっしたんです。ですから私まさか自分が書くんだと初め思わなかったんです。ところが3、4か月経ちましてから先生に、「お前さんそろそろ原稿を出し始めなよ」ということを言われまして、「あっ先生が書くんじゃないんですか」と言いますと、「冗談じゃない、あんたが書くんだよ」って大喝一声怒鳴りつけられまして、「何を今までそんなことをぼやぼやしてたんだ」と言われました。何しろ相手は「元帥」です。さあこっちは大慌てに慌てまして、それで営団へ通う足も従って激しくなりました。資料を営団の外のあるべき人々の間を走り回って、探し回るなんていうことをやりながら前述のように必死で「食糧営団史」を、これは50年ぐら以後にならないと利用してくれる人は出て来ないだろうな、必要性も生まれまいだろうなと思いつつも、とにかく1,100頁程の大型にまとめました。

そこへもう一つ私を驚かせたことが実はおきたのです。といいますのは、先程のような上級特別研究生というものにさしていただいた翌年、その時に私は予科の講師になって、3年生に社会経済史という授業を担当せよ、それまでは高村先生が担当されていた授業を担当せよと言われてまして、当初自分は教師になるつもりはなかったけれど、しかし何とか自分の不十分さをむしろ学生にわかってもらえれば、反面教師としての役に立てるかもしれないとも考え、予科講師を兼任することになったわけなんです。

(3)

そこで戦争から帰って来てわれわれと一緒に共同研究、勉強をやっておりました仲間、この仲間が一番初めに帰って来ましたが、10月の増井さんでした。それから一度社会に出てから応召した人が復員し、帰って来たけれど、もう会社勤めが嫌になって慶応へ帰って来るといった人が翌年続きました。亡くなった宇尾野さんであるとか、あるいは青沼君であるとか、白石孝君であるとかいう方が、翌年へかけて続々と帰って来えました。それから翌年になりました時にニューギニアから当時助手でした島崎さんも帰って来えました。折から学部長野村先生によって経済学会が再開される中で、こういう人たちの間でもって共同に勉強を始めようじゃないかということで、毎週日曜日に各人の家庭を渡り歩きまして、アダム・スミスの『諸国民の富』の輪読から勉強し始めました。それがつぎに今度はマルクスの『資本論』に取り組もうじゃないかということになりました。その頃はもう1948年の段階に入っており、黒川君とか福岡君とかいう方が加わり出すようになり、一緒に勉強して、それで「資本論」の中の物神性だとか何とか統一した解釈が見つからない問題に突き当たると、小池基之さんのところへ教えを請いに行ったり、あるいはまた当時、戦後兼任講師という形でみえていた、遊部久蔵さんのところへ伺いに行ったりしました。黒川君なんていう人は仲々茶目っ気があって、小池さんと、遊部さんの言うこととはこう食い違ふよ、この食い違いを利用して一つ両方いじめてみようじゃないかなんていうようなことを言い出したりしながら、一緒に共同研究をやっておったような次第なんです。

ところがそうこうしている間に、学部内で研究室の中で若い者の赤化運動が起っているという噂が流れ出したとかで、実は『資本論』研究というものがそういう誤解を招いたようですが、結局のところもうひとつの別な共同研究が始められる、福岡君なんかそちらの方へ吸収されていったり、そのグループも次第に人数をまし後に『ジェヴォンズ』の輪読を始められて、後日その翻訳書を出されるというような成果になって、その共同研究はまとまりました。いっぽうわれわれの方はマルクスを研究している間に、日本の資本主義の理解についての議論に発展することが多く、それではいっそのこと資本論は各自で読みすすめながら共同研究としては、むしろ現実の日本経済社会の基礎構造の歴史研究をしようじゃないかということになって、まず明治維新史研究からスタートしよ

う。それで西南諸藩つまり討幕側と、それから東北諸藩の佐幕側と、こういう諸藩が何故分かれたか、その経済的な根拠をお互いに分業して調べようじゃないかということになり、私は鹿児島藩、島崎さんは南部藩を引受け、それぞれそういうように手分けをし、共同研究を始めかけたところへ、関東農村の研究をやるようにということになりました。それは野村さんが集められた膨大な農村文書が慶応義塾に寄付されるからそれを利用して関東農村の研究をせよということなのです。そこで右の純粹理論のグループに入っていない人々が殆ど駆り出されて、高村・小池両先生を中心にその研究をやったわけなんです。

例えば「国際貿易論」の白石君「賃金論」の黒川君、こういうような方々までが「宗門改帳」の家族構成を一所懸命引き写しまして、人口統計をとらされたりしました。そこで当然古文書の文字が読めないとかいうことがおこり、それを私と京都大学の大学院から帰ってまいりました服部謙太郎君と2人が解説しながら手伝う共同研究をやった。その結果それまで見落されていた関東農村の研究の意味について学会に一つの石を投げ、影響を与えたといえると思います。

(4)

その間1948年に丁度私が予科講師を兼務した際、実は面白い珍現象がおきたのです。それは戦後初めて経済学部で助手を1名採用すると発表され、その時に、私を除いたほかの人は全部それに応募したんです。応募しなかったのは私1人。たった1人採るというのに、仲間同志でつぶし合ってたってしょうがないじゃないか、僕は嫌だよって行って私それに応募しなかったんです。ほかの方はみんなお受けになった。それで学部の教授会のほうも困ったとみえまして、結局結論として出されたことが、第1回の助手はその年度の新しい卒業生に限るという方針を出したんです。それに従い助手として採用されたのが福岡正夫君でした。それではほかの応募した方達はどうなったかというと、教授会も試験を避け全部、副手とした。それが副手制度の誕生です。後に労働組合ができてから問題とされ撤廃された副手制度は初めは助手よりも副手たちのほうが先輩だったという妙な恰好でした。

当時の金原学部長は、それまで私達特研究生達の質問に対する答弁で、「慶応義塾が戦後、助手がほしくとも財政状態が許さないので、文部省から給与を受ける特別研究生をもって実質上の助手とみなして扱っている」とおっしゃっていた。それをそのままにしておいて、新しく助手1名採用とか応募した先輩達を特研究生のまま無給副手という新しい地位におくとかの方針を出すこと自体がおかしかったのです。

しかもそれに次いで又々珍妙なことが起きました。それは事務処理上のことなので初めは気がつかなかったのですが、後になりまして実は副手になった人はそこから学校の勤続年数が始まることになったんです。だから当時助手を受けず、従って副手にならずに予科講師だった私は特別研究

生、しかも上級特別研究生であったのに非常勤扱いとされてしまった（当時そうなるとは私達の誰も考えつかなかった）のです。さらにこれが翌1949（昭和24）年の新制教育への切り換えの時に、副手になった方々は1人を例外として他は助教授に移動されたわけです。その時私だけは助教授じゃなくて専任講師という形になった。おかしいなあ、戦後派ナンバーワンと言っていた自分だったんだがなあなんていうような皮肉めいた考え以外、それを別にとやかく思ったことはありませんでした。その2年後に「食糧営団史」の業績を認めていただいて、京都から帰られた服部謙太郎君、それから病気の癒った中鉢君と一緒に、同じ日に助教授に昇進しました。ただびっくりしたのはこの新制切換えの時にいきなり持たされた科目が、一般経済史を全クラスにという指示でした。それまで一般経済史は野村先生と高村先生が全クラスを二分して、お二人でわけ持たれていたのです。その時野村先生から、「日本を研究するためにはヨーロッパ先進国のことを知らなきゃ駄目だよ、そうでないと特殊性と一般性の分別がつかず本当の日本研究はできないよ」と言われました。確かに先生は、日本におけるイギリス経済史研究の草分けの一人であり、その上で日本経済史研究をそれまでの地方書から農民資料へと移される草分けになられたかたですから、先生からの言葉は確かなことです。けれども、卒業して3年の若僧にはいづくまで至難の課題です。私も必死に勉強を拵げていました。野村・高村先生のものはいうに及ばず、増田四郎、小松芳喬、大塚久雄さん方先覚に啓発され、アシュリーをはじめとしてピレンヌ、ドプシュ等々。結局一番頼ったのは「クーリッシャー」でした。ノートへ主なところはほとんど翻訳、後でもって翻訳書にまとめて出版でもする余裕があったら本当によかったのになあなんて、悔やんだくらい一所懸命とりくみました。

要するに第1期の間は無我夢中なまま学内諸条件の変化にふり廻されながら1953（昭和28）年の発病まで進んでしまった。その間学内の仕組みも知らず、激動していた世間のことも正確に認識できていない、もともと勉強を始めた初志が方向を誤まりかけたいわゆる専門バカになりかけていたようです。

その私が少し目覚めさせてもらうきっかけになりましたのは、ひとつは共同研究を共にした先輩、友人諸兄から受けた刺戟でした。ついで病氣中に読んだストーンというアメリカ人記者の「秘史朝鮮戦争」でした。これにびっくりしまして、それから必死になって、自分で新聞を読む読み方を寝ながら勉強する。当時朝鮮戦争が停戦になり捕虜交換の最中でしたが、日本の新聞を読んでいますとながどうなのか、年中トラブルが起ってるのが理由が全くわからない。それで中立国で監視委員会を作っていたインドとか、カナダとかポーランドとかいう委員会がお手揚げ、もう怒って委員会を引き揚げるとか、これけしからんとかいうことを言ってるんですけど、日本の新聞を読んでいると真相がちっともわからない。当時はマッカーサー司令部の検閲下にある新聞ですから、わからないのは当然の話なんですけれども、それをストーンの手法を真似しまして、私寝ながら沢山の新聞を取り寄せて一所懸命比較検討していくと、すっきりとした線が出てきて実情が非常によく

わかる。それから自分は、あゝ新聞でもこうして読む勉強をしなければならないんだな、という痛切な経験をしたことがあるのです。

四

(1)

3年に亙った病氣も治り、その間野村先生の誤解もとけ、1956(昭和31)年高村学部長が呼び返しにきて下さり、復学してからが第2期と申せましょうか。しかし復学したとたん私の肩には「日本林業発達史」の問題がのしかかってきました。

これはもともと別の方が中心で書き、服部君と私が序論部分とアドバイス役ということでスタートした企画だったのですが、私の病氣中に服部君は精工舎へ戻り、本論を書くことになっていた中心の方は他校へ移籍なさり、そのうえ新保君も神戸大学へ移るといのように移動が激しく、そのため関東農村の研究も継続できなくなってしまふ始末となり、この林業史が病床の私に廻ってきたわけでした。それから後の10年間といいますのが、先程ご紹介がありましたような、「日本林業発達史」の上巻、下巻、それぞれ800ページばかりの本でございます。これもやっぱり、私がやり出すとどうしても4年単位ということになりまして、お尻を叩かれながら部分部分を学会誌へ発表していくというような余裕もないままに夢中で、その当時約5年にわたって長く担当しておった商学部の初代学生部副部長の任務に忙殺されながら四苦八苦でまとめていったのです。その途中、更に慶応義塾が百年祭を迎えたにつきまして、「百年史の経済学部編」を書けということが加わったのです。これはでき上がった結果僅か200ページばかりのものでございますけれども、これには実は非常に精力を使いました。それには膨大な注が付けてございましたが、あとでそれが全部紙数の関係からと削られてしまふて、残念なことにはその原稿までが焼却されてしまったのです。後日、高橋誠一郎先生が講演で「百年史」にふれられた折、経済学部編の1ヶ所の記載に1年間の誤りがないかと指摘された際、時の高村塾長から「再確認せよ」とのメモが廻ってき、早速それを調べ直そうと「百年史」の事務所へ飛んで行きましたところが、既にもうそれが破棄済みというようなことで確める方途がなく、私としては必死になって調べ上げ、膨大な注を付ける努力をただけに誠に残念でした。先人の書かれたものを一通り必死になって読みながら、経済学部のカリキュラムの変更を自分で、当時は教務にも資料が残っておりませんで、それを一所懸命探索しながら、労力は非常に使ったんです。そういうようなことをしてまとめた、「経済学部編」ですね、これもまた必死になってやっておった時代なんです。

ですからこの前半の20年間というものは、野村先生や、後には高村先生やから、次の原稿を早く出して来いと常にお尻を叩かれながら自分は無我夢中で勉強して、そしてまたそれを書きまくって

いたというような時期といえます。それだけに前半の時期が終わった頃には私は、これからは自分が本当に勉強したい、纏めたいと思ったことをやっていきたいと考えていました。但し、既にちょっと一言触れました、関東農村の研究、これは事実上私にとってタブーとされていた（事情は御賢察下さい）だけに、当時担当していた産業史分野の開拓を進め、その成果を書きたいと考えました（商学部移籍に際し野村先生から「これからはビジネス・ヒストリーを開拓してくれ」といわれたのですが、鈴木保良商学部長からは「小高門下でないとその分野を扱ってはならぬ」と禁止されたので）。そこへ、留学ということになったわけです。

(2)

右の第2期の真ん中頃に起りましたのが60年安保という時期。この60年安保の経験をここで詳しくお話する余裕がないのが残念ですが、あちらの方にいらっしゃる白井厚君と御一緒に非常に得難い経験もしました。私は当時副部長でしたから、学生が今日も三田から千人、日吉から2千人と毎日デモに行くのに、学生部がそれを一緒に付き添わないのはおかしいと、初めは自分自身はデモもしたことのないおとなしい人間だったんですけれども、デモについていっているうちに、だんだんと自分でもって自発的にデモをするようになっていったんです。それが6月15日の樺事件の時、それに丁度引っかけましたのが、今名前を出した白井厚君と私でした。学者集団を代表するという形でもって、警官隊と学生隊との間を分けに国会の中へ入ったばかりに、一晩中監禁状態におかれてしまい、その夜中の中にいろんな事件が起って、私達の結果を待っていた学者集団が警官隊に襲われて、それで経済学部の井村喜代子君や寺尾誠君が、われわれのいる国会の中の部屋へ逃げ込んで来て、そのおかげで怪我をせずにすんで、外におられた非常に多くの方達は惨たんたる怪我をなさいました。私達は明け方になって命からがら脱出し、学校に戻って交替で三田と日吉で実情報告をしたので覚えておいでの方もおありでしょう。このような、安保騒動を挟みまして、私は加速度的に社会に対する目の向け方が、先程のストーンの影響に輪をかけて育ってきたようなわけがございます。

それと平行して、当時5年間にわたって学生部の仕事をしたこと、恐らく学生部の歴史をどなたか後でお書きになることがあるとすれば、一番学生部が活発に動いて活動したのは、あの時代ではなかったかと思いますが、おかげで学内の各仕組みも分ってき、学生生活とか大学教育とかについて随分と考えさせられる機会を得ました。当時は、自治会もしっかりしておりましただけに、紛争にはなりませんでしたが、自治会との話が非常にエキサイトして、緊迫したこともある時期で、学生部も次々に学内のいろんな改善をやっていきました。私は初代の商学部の副部長という形で出ましたけれども、経済学部からは黒川君が出ていて、この方はむしろクラブ活動を代表として、それまで文連1本だけしか公認制がなかったのを、新しいクラブをまとめて独立パートというのをつ

くって、それで両方とも平等に公認制でもって扱うという、いわゆる公認制度であるとか、それからビラの許可制を届出制に直すとか、そういうことを中心におやりになりましたし、それから法学部から平君が出ておられまして、平君は専ら慶応義塾が初めて出す奨学金の制度の制度づくりということに取り組んでおられました。私は厚生関係ということでむしろ食堂諸問題、それとか寄宿舎建設計画問題であるとか、それから学生の中の健康保険制度をつくるとか、そういう問題というよりなものに取り組んだ時代であったわけです。

この中で特に、非常に思い出に残っておりますのは、今は直営食堂になって残っておりますこの食堂を造る時の問題でございました。何しろ当時は三田の山の上に、丁度西校舎の跡に山食がありましたが、140人しか席がなかったんです。ですから全部の学生が下へ降りて昼食をとろうにも店屋が非常に少なかった。だから1時の授業までに帰って来られない。従ってみんなの多くが麻雀屋にしけ込んでしまうという形になってしまっていたんです。真面目な学生の中からは、従って日吉のような食堂を造れという要求が出ていました。当時は日吉には二幸食堂その他業者食堂しかありませんでしたけれど、日吉にはまだみじめだけれども食堂がある、それを造れという要求が非常に凄まじくて、紛争が起きかねない情勢でした。

ところがそれに対する塾——その時私しみじみ感じたのは、学生とか教職員の福利厚生という問題に対して、どうして慶応義塾というのは冷たいんだろうということでした。何しろ当時の担当理事町田さんはにべもなく「大学は食いの面倒をみる所ではない」と取りあおうとしない。それに対して私は前述の現実をあげて大学教育の責任を追及しました。とにかく冷たいものでした。それについて冷たいということで私ちょっと思い出すことが出てまいります。と申しますのは、前年の20年代の途中で、これは高村先生あたりがプランを立てられまして、野村さんを学士院会員に推そうじゃないかという運動をなさったんです。そして学士院会員には3人の推薦者の判がいる。従って高橋誠一郎先生、それから元の塾長をされていた林毅陸先生、それから更にはその直前まで塾長だった小泉信三さん、こういう方の判をもらわなきゃならない。お前林毅陸先生の判をいただきに行って来いと、そこで私は恵比寿の林先生のお宅まで伺ったわけです。林先生が前塾長だったということは私聞いておりますけれど、直接お会いしたのは初めてでした。林先生は実はそれから間もなくお亡くなりになるんですけれども、その直前の病床の枕元まで私を招き入れ、そこで私の申し出に応じて快く判を付けてくださったんです。それでその時、今慶応義塾はどうだというようなことのご質問を受けまして、当時私学内のことも何にもよくわからない若僧でございましたが、それなりのいろんな答えをしている間に、林先生がもう全身が硬直して震え出すような態で、非常なお怒りをぶつけられたことが実はあったんです。慶応義塾というのは実に冷たい学校で、実にけしからん学校だということを身を震わせながら激怒されて、私は意味がさっぱりわからなくて、ぼかーんとせざるを得なくて、ただその気迫にだけ押されていたんです。ところがだいぶ後にな

りまして、私が評議員会へ出るようになってからでございますけれど、一番確実な先輩の方からその真相を伺ったことがありました。林先生がこうだったという思い出を申しますと、そうしますとその先生が言われたのは、慶応の欠点はここですねと、実はあれは塾内でクーデターが起って、林先生は引きずり降ろされたんだと、まんまとクーデターに引っかけたんだと、小泉信三さんを塾長にするためのクーデターだったんだという真相を初めて聞かされまして、今更のようにびっくりしたことがあるわけです。

それから考えてみますと、私が後に3年間病気（この病気の時にも実は説明している余裕がございませんでしたけれど、私が非常に尊敬していた野村先生の言いなりにならなかったばかりに、病臥中に学校から籍を抜かれ除名されてしまい）、給料が支給されず療養に非常に困ったことがありました。これは先生を責めるつもりは毛頭ございませんけれども、そういうことのために私のところへ皆病気見舞に来てくれるのがタブーという恰好で、来てくださる方が、初め1人、2人来てくださったというだけでもって、3年間どなたも来てくださらなかった。その時に私も、あれだけみんなで仲良く和気あいあいとしてやった仲間なのに、見舞いに来ることさえしてくれないのかなあという、非常に淋しい気持ちに陥ったことがあるわけなんです。そのような事件をめぐって、いろいろ慶応人の冷たさと林先生がおっしゃったのは、こういうようなことなんだろうか。林先生も塾長をやめてから病気がちでもってお休みになっている間、どなたもお見舞してないような気配だった。そういうことなのかなというような察しをしていたんです。

なお、この時、林先生は快く署名して下さいましたが、小泉さんは拒否され、その代りに早稲田の久保田明光先生のお宅へ伺ったことを記憶しています。小泉さんのところへは高村先生がいらしたので、拒否の理由を直接きいたわけではありません。しかし敗戦直後野村先生が研究会の途中で私を室外に連れ出し「あとを頼む。これから病院まで小泉先生に会いにいってくるから」ということが屢々ありました。これは当時「負傷したからといって塾長は絶対やめない」といわれる小泉さんに、当時の経済学部長の野村さんが塾内の圧倒的意見を背負い、自発的辞職を勧告しに通った。小泉さんは仲々やめようとしませんが、早く決断されないと教育追放になると野村さんはそれを心配していた。あとになって野村先生が「僕は良かれと忠告したが、そのため小泉先生には徹底的に憎まれてしまった」と洩らされたことがありました。私はそれがこの拒否事態につながるのではないかと推測します。

(3)

学生部で食堂・寄宿舎・自治会等々問題ごとにあっちの部署と掛け合い、こっちの部署と掛け合い、いろんなことをやっている間に、学内の仕組みがだんだんわかってきました。そうすると一般の教員が余りにそういうことを知らなすぎるような仕組み、これを正確に知ったらみんなうかうか

と安心して研究もしていられないような学校の体質のおかしさ、これを何とか直さなきゃということでもって、実はそれ以後本当は自分の本式の研究を始めたいという願望を持ちながら、それと同時に学校の中をみんな友人たちがまともに学問をして教育ができるような、しっかりした組織の学校にするようなことを、だれかがしなければいけないんだ。慶応義塾では長期計画をつくるような委員会とかの場すらもない。学生部時代に私たち5人の副部長共同提案でもって、当時塾長以下全教員（初めの年は全教員を集めるだけの余裕がありませんでしたが、各学部からピックアップしまして）その代表たちを全部夏休み中に、さる東京を離れた所に閉じこめまして、教育問題についてのテーマを自主的に論じ合うという、そういうことを実は始めたことがあるんです。

それから学生については、自治会主催で毎年ワークキャンプというのをやって百数十人学生が応募し、確か1958年から初年度は裏磐梯、2年目は戸隠、3年目（60年安保の年）は蓼科と続いていた。それを学生部も後援し、各学部から諸年齢層の教員達を依頼し組み合わせまして、班別のアドバイザーに編制し1週間ぐらい付き添って、パネルディスカッションをやって、学園生活の問題ということをして学生同志が討論をした。このことが非常に教員同志の交流を各学部にわたって広げた。私は友人が普通以上に多い方ですが、この縁からつきあうようになった友人が非常に多い。とくに右の教員の研究集会をやったということ、これが非常に貴重で、こういうものを育てなきゃと思ったんでございますけれども、これも後には結局続かなくなってしまった。翌年は、前の年学生部でやったがこれは教務がやるべきことだというような論理が出され、その翌年には消滅してしまったことは非常に残念なんです。そういうような長期計画、今も方々でその都度、いろんな建設事業を始めておりますけど、いつも何か出たところ勝負でもって、この西校舎を造った時もそうでしたが、思い付き、その場その場でもって処理をなさっている。継続して10年先、50年先という展望で大きなプランをつくるという場が、慶応義塾の中にはできていないし、いつまでたっても作ろうとしないことが、私には非常に残念でしようがないんです。

このように第2期は当面する課題に必死に立ち向っていた点は前と同様で、必死になってもものわからず勉強しながら、途中から学内の実情にも明るくなり、また社会的な意識の急速な目覚めと平行に自分の学問方法論も、自分なりの唯物史観として大筋はまとまったといえる時期だったと思います。

それにつけ野村先生が最後の学会報告をなさった時のことを思い出します。野村先生は決して唯物史観ではございませんでしたけれど、経済学会で最後になさった報告では、唯物史観のことに論及されまして、人類の歴史でこれまでの歴史というものは、唯物史観の方法が全部当てはまる。問題はこれから以後の人間が創る歴史はどういう方法を使うべきかだ、というようなことをおっしゃったのが私の記憶には非常に印象的に残っております。野村先生の唯物史観の解釈はそういうご解釈だったんだなあ、私はそれとは違、野村先生を自分なりにやっちょっとばかりをのり越える

ことができたかなというような感じを持ったことがあります。

五

(1)

丁度真ん中の20年目、1965年、昭和で言いますと40年ですね。丁度戦後20年、今から20年前に、私は留学に出まして、オックスフォード大学のオール・ソウルズカレッジへ留学しました。これは早稲田大学の小松芳喬先生のご配慮で高名なH. J. ハバカク教授をご紹介頂く恩恵に浴し、丁度同教授がディーン(学部長)をしておられただけに、先方の教授会で私の留学を通していただきまして、研究室その他での利用を自由にさせていただき毎週教授と討論の時間を作っていたと、非常に身に余る処遇を受けながら、留学をさせていただいたようなわけです。

その留学でもって私、実は忘れもしない、本日との関連であります。この目の前にも当時のOBの1人がおりますけれども、丁度20年前の今日、もうそれで思い出された方がいらっしゃるかもわかりません。つまり塾の学費紛争が始まった日なんです。1月22日、20年前のこの日に私は、横浜から船出しまして、イギリスへ向けて留学に旅立ったのでした。ところがその22日の朝から学生が一斉に座り込みを始めた。それはその2日前の20日の日に評議員会が開かれて、授業料大幅値上げを可決し、翌21日にその発表をした。それで22日朝から学生が騒ぎ出して全面的ストに入った。当時は自治会が非常にしっかりしておりましたから、非常に整然としてストをやられたようです。

実は平生の年でございますと、慶応義塾で授業料値上げを決める場合には、前の11月の評議員会で決めるんです。それでいろんな書類その他の手続きをしまして、値上げのことを発表していくわけなんです。その年はたまたま教職員労働組合との年末手当の団体交渉が、あれは永戸教授が委員長だった時でございますけれど、こじれて年を越してしまった。ですからその解決がつかない前に授業料値上げを決めてしまうと、組合に足許をつけ込まれるという配慮から、義塾当局は実は評議員会開催を延ばしまして、それで労働組合との年末手当の交渉が終った途端に、その1月20日に変則的な評議員会を開きまして値上げを決め、そのために紛争が起った。これが翌年は早稲田に及び、その翌年は明治に波及し、授業料紛争が私学間で続く中、だんだん血みどろの争いへと激化してくる。そこへもってきて官学での寄宿舎問題など全国的な紛争が広がるという、40年代の大学紛争時代の幕開けにもあたるこの紛争が、実は当時は世間から、「親孝行スト」とかいうような言葉で冷やかされたそうです。しかし、むしろ「親孝行スト」というよりも後輩のために先輩がストをと、つまり当時は新生からしか授業料は値上げができません、今のようなスライド制じゃございませんから、新生しか値上げができないということでした時代でありますから、本人すなわち自分の授業料のために学生たちがストライキを打ったわけでは毛頭ない。自分の親父のために打っ

たわけでも毛頭ないんで、「親孝行スト」というのは少し世間が実情を知らない、見当違いの評価だと私は思います。

帰国してからどうして翌年の早稲田があんな血みどろの闘争になって、明治でもって更にひどくなる、どうしてだろう、と調べて考えたものです。慶応は非常に静粛に見事に水際立ったストライキをやったのけた。そのストの内容にはいろいろ問題、反省点はあったようではありますが、非常に整然といったことを考えてみました場合に、やはりクラス制の授業というものが、慶応義塾はほかの大学と比べてきちっとしていた。それから研究会のシステムというのが、三田の専門課程ではきちっとしていた。それに加えて原書講読という授業が、英書講読、独、仏書講読という形で、三田では各クラスきちんと行われて、講読担当者が実質上のクラス担任というような役割を果たしていた。つまりクラス単位・研究会ごとにきちっとした授業が行われていた。その場を使って各クラスで討論して、それが自治会へ吸収されていったから、早稲田などと違って一部の跳ね上がり分子だけが自治会を、全塾の名前でもって切って回して、妙な闘争をするなんていう憂いが当時はなかったんだと思います。それがやはりよその大学と比べて慶応の良かったところだということをして、つくづく反省したことがございます。

後になりますと慶応も、よその大学に巻き込まれたり、よその大学の学生が入って来たりしまして、各種の紛争が続く中で、だんだんと自治会が妙な形になったり、その結果二つに割れて壊れたりというような形に実はなってしまうわけでございますが……。

(2)

留学から帰ったの後半期は、途端に労働組合の執行委員長をやらされる結果になってみたり、それが終わったと思えば今度は学部から評議員会と大学評議会へ出され、そして更に通信教育部の学務委員に出され、国際センターの学務委員と、みんなそれがダブリまして、実はそれだけで手一杯というところ、それに加わったのが鎌倉の市民運動と朝鮮問題でした。

前の学内諸問題への関与は、すでに学生部時代、なまじ義塾の体質の悪い面を知り始めたばかりに（尤も労組は塾長が高村さん時代は固辞していたのが留学中高村内閣が倒れ、固辞する理由を失ったからですが……）、自分のような中途半端ないきがりをもつ人間しか、業績・昇進を気にする他の人々に代って当る者は出ないと考えていたからでした。

しかし後の二者は、まさしく留学の産物です。留学中私はヨーロッパ各国（東西を含め）約170の都市を自分の脚で歩きました。そして都市を作る人間関係（共同体）という結論に立って日本の町のみじめさを考え、帰国後取り組まざるを得なくなったのが鎌倉の市民運動でした。

また朝鮮問題については以前より関心はあったものの、留学中はベトナム戦争最盛期で、西欧各国庶民の対応ぶりに触発され、日本人としての反省から一番先に対処すべき問題と考えたからです。

その結果私は自分でものを書く余裕など全くない凄まじいまでの状態に陥ってしまったのです。

そのうち労働組合一つを取り上げましても、当時副委員長の常盤教授をはじめ、多くの方に助けをいただきましたからできたんでありますけれども、1年間に百回に及ぶ、3日に1回か4日に1回は団交してるというような、そういう凄まじい思いをしていたような状態だったわけです。

その結果できましたのが、今、サバーティカルと呼んでおります特別研究期間制度、私がオックスフォードでみてきているだけに、これをせめて教員のために、学問の研究のためにつくらなければということをやったこと、これだけが、その後途中で一時廃止の危機に瀕したことがございますけれども、比較的近年改善の努力が実って制度的に拡充されて本来狙った方向へ近づいて来ているのは、非常に結構なことだと思っております。けれども、そのほかの先程の教員の全体集会を初めとして、直営食堂もそうでございますけれどもその他評議員会でそれなりの努力をしてやって来たことが全部中途半端で後に壊されてしまったのは甚だ残念です。

(3)

この第3期に当る時期の私はいろんな仕事とぶつかりながら、学校の中のいろんな改革、通信へ出た時には通信の全面的な改革というようなことも意図してやってみたり、いろんなことをやったんですが、それが結局後へ続かなくて、次々に中途半端で壊れていく。そういうことを考えてみますと、先程藤澤学部長から非常なお褒めの言葉をいただいて恐縮なんですけれども、私のやったことはみんな中途半端だったという、これは個人だけの力では駄目なんだという結果、また若い頃に先輩達から、「学内をなまじ改善しようとする者は自分が傷つくだけだから不問にしろ」といわれたことに途中で反発したことがやはり予言通りになったのかと口惜しい気がします。せめて後半期には自分らしいものをまとめたいと思っていながら、それができないくらいに学内学外で動き回り過ぎたんです。それがしかしどれだけの人が理解して支えて下さり実を結んだかといえますと、極く限られております。その紛争時点の最中におきましても、学部改革というようなものがございまして、これも身をもって努力してやったつもりでございますけれども、それもその後におきまして学部の委員会、初っ端に私ちょっと妙なことを申し上げましたような形で、ズルズルと心配の種が出て来るような推移を辿っているように思えてなりません。そこで私はかつて時の学部の学会委員の方に対して「私に1回学会で少々特殊にみえるが報告させてほしい。そして学会誌に掲載してほしい。学部の運営や教育体制の制度で決めたはずのことさえその後の動き方、運び方が非常におかしい点が多いのを反省したい。それを私は戦後の国の教育制度全体の変化と関係させて論文式に書くから発表させて貰いたい。」ということをお願いしたんですが、それは専門研究に該当しないからと拒絶され、その時私もつい腹を立て、「学部の学会誌、というものが教育とか学部運営とかの反省や論議を排除するような論文だけを『専門、』といって載せる雑誌だとするならば、私は以後一切

学会雑誌にものを書かない」なんていうような啖呵を切って、意地っ張りのような形になってしまったことがあります。このように色んな努力をしたり又しようとしても、その多くが中途半端な恰好になってしまったわけです。

六

(1)

その揚句最後の10年間にしましても、本来この10年こそ私は最後に自分の締め括りでものをまとめようということを計画した途端に起ったのが、入学試験の問題漏洩事件でありました。その時私は本当は教育委員会であり入試委員ではなかったのに、途中から後者も兼任させられ、大変な迷惑をしました。最初から入試委員だったら、ああいう出題者選任は拒否しています。出題者が決った後になってから急に入試委員会の幹事にされてしまった。それだけに当時の学部長の白石君と一緒に協力して、徹底的な処理はやったわけでありすけれども、しかしその反作用は非常に多く「仲間を切った冷酷者」とか「新聞へ流したのは彼だ」とか、さまざまな返り血を浴びざるを得ないような恰好になった経験があるわけでございます。あのような余計な混乱は当時の運営委員会での人選の安易さにあったとってよいと思います。そういうように私のしたことは中途半端に終わったことが多かったわけです。

(2)

この戦後の20年間で常に書こう書こうと思いつつに、何ひとつまとまった業績が書けぬ醜態を晒した。これは事実です。もっともあれを無理して書いていたら今頃とっくに死んでいただろうと思いますけれど、欲張ったことをし過ぎたことが、結果としてはかえって中途半端になり、結局ものをまとめることができなかつた。これから後どれだけの寿命があって、どれだけのことが自分にできるかどうかわかりませんが、自分なりにこれからの人生を歩んでまいりたいと思います。しかし幸いながら私としてはこの40年いろいろなことに、次々と目覚めさせていただきました。その結果慶応義塾の抱えているいくつもの問題点ということを並べあげて皆さんに今後の御参考に供したかったのでございますけれども、時間もないままご賢察に委ねるよりほかはないということになりますし、今更年寄りが口出しする幕でもなかりと、もう皆さんから将来何かの参考にお聞きいただければ、それなりに私の長い経験を通じてご参考に申し上げることにやぶさかでないつもりをしております。又そういう発言が自由にできるところに義塾の真の良さがあると信じます。そういう義塾の一面が、私を今日まで脱皮させ育ててくれたと心から感謝しているところです。

後に残り義塾を新しく作り変えてくださいます貴重な人材である優秀な方々を前にして、今更こ

んなことを申し上げる必要はないと思いますけれど、現在の社会情勢や、国際情勢は、一面において、雪溶けの気配があるような気運になりかけると、その都度何か攪乱事態が起って妨害される。そのような繰り返しがひどい時期であるだけに、それだけにやはり市民運動とか民衆運動とか、反核運動とかそういうものが続くかどうかという問題が非常に貴重な決め手を握っていると思います。大学の中におきましても、例えばよその大学の教授会から決議文のアピールが回ってくる。学術会議からのアピールが回ってくる、そういったような文書は教授会の中では回覧文書として回すだけであって、教授会の議題にのせようとしなさい。ともに社会のことを論じようとはしない。しかしそれで果して真の教授会といえるでしょうか。学問につながる限りにおいてはそれを論ずべきじゃないでしょうか。それが本当は学問を学ぶ人間のなすべき前提条件ではないかと、私は基本的にそう思います。従って必要な社会参加と申しますか、そういうことを教授会——（個々の人間がやったんでは到底処理できる問題ではないというのは、私の愚かな例が身をもって示した反面のモデルであるということをお考えくださいまして）教授会の中に、できれば全学的なそういう、先程申したようなシステムというのをつかって、長期的展望で方針を築き上げる努力をしながら、義塾が社会をむしろ啓蒙していくべきだと思います。権力や社会（惰性的な）の言いなりに迎合して動いていくだけでは、ろくな教育改善ができるはずがありません。慶応義塾がむしろ先頭を切って、ほかの大学にも影響を与え、そして社会にもいろいろな批判その他のショッキングな刺戟を与え、そうして世界のために貢献していただきたい。非常に大げさな言い方になって恐縮でございますけれども、そういうような展望をお持ちいただきながら、塾内の向上に教授会の中で皆さんが輪を広げて行くご努力を、是非お願いしたいと思います。最後に、私のような勝手放題の人間を自由に脱皮させて下さった義塾全般の方々に改めて感謝しつつ、声がかれておりまして非常にお聞き辛かったと思いますが、この粗末な話をご静聴下さり、平生特に親しく御教導下さったここにお集りの皆さんに長年のご友情を感謝しながら、これでせめてものお別れの御挨拶とさせていただきますと思います。どうも長いことありがとうございました。（拍手）